研究発表　分科会 8-2　グローバルな共感 10 月 15 日（日）16：25-17：05　第一校舎 124

クレメント・グリーンバーグの美学における美的判断の構造 —— カント美学との連関を手がかりに

東京藝術大学　大澤 慶久

20 世紀半ばのアメリカの現代美術に多大な影響を及ぼしたクレメント・グリーンバーグ（Clement Greenberg, 1909-1994）は、作品の形式的特徴を精緻に記述するフォーマリズムの美術批評家として知られている。同時に、「さらに新たなるラオコーンに向かって」や「モダニスト・ペインティング」などに認められる視覚性の重視や還元主義的な歴史観においてモダニストとして広く知られた批評家でもある。他方で、グリーンバーグは批評活動から一線を退いた後、美学に関する文章や発言も多く残している。「セミナー」がその代表的なテクストであり、グリーンバーグの美学研究はその解釈をめぐって展開されてきたといってよい。

そこでの議論は主にカント美学との異同に主眼が置かれている。カント美学を拠り所として美的判断の客観性を主張する「セミナー３」に関する研究は、グリーンバーグによるカント美学の解釈の是非を問うものであり、芸術の慣習と革新を主題とする「セミナー６」に関する研究は、美的判断の規定根拠に関してグリーンバーグとカント美学との相違を検証するものである。これまでの研究では、確かに上記の二つの観点においては詳しく論じられてきたが、グリーンバーグのいう直観、快、美的距離などの概念について十分に検討されてきたとは言い難く、それゆえそれら諸概念の関係性に基づく彼の考える美的判断は明らかにされていない。そこで本発表は、カント美学との連関を手かがりに、彼の美学的著述である「セミナー」において彼が用いている直観、快、美的距離などの概念及びそれらの関係性について検討し、それを通じてグリーンバーグの美的判断の構造を明らかにする。

本発表では、グリーンバーグの「美的判断と美的経験は同時に生じる」という繰り返し行われる提言が意味するところを見据えて各概念を分析し、次のような主張を行う。グリーンバーグの考える美的判断の快は直観であると同時に「高揚した認識の快」である。また、美的判断に至るプロセスは、非自発的ないし無意識的に遂行されるものであり、それは事後的に意識されるため、「美的判断と美的経験は同時に生じる」ということになる。ただしその条件として、「美的距離」が必要であるが、これも美的判断と同時に生じるものであり、そのさらなる条件として美的な心構えが要請される。

グリーンバーグの考える美的判断は、『判断力批判』の無関心性の問題と§9「趣味判断では快の感情が対象の判定に先行するか、それとも対象の判定が快に先行するか」において提起された問題を拠り所としつつ展開されたものであり、特にグリーンバーグによる§9 の解釈はこれまで大いに看過されてきたといえる。だが、それらとの関連性においてグリーンバーグの考える美的判断の非自発性や快の特性は明らかになるのであり、本発表の考察を通じて、その美的判断の構造のみならずカント美学との異同についての新たな視座を提示することができるだろう。